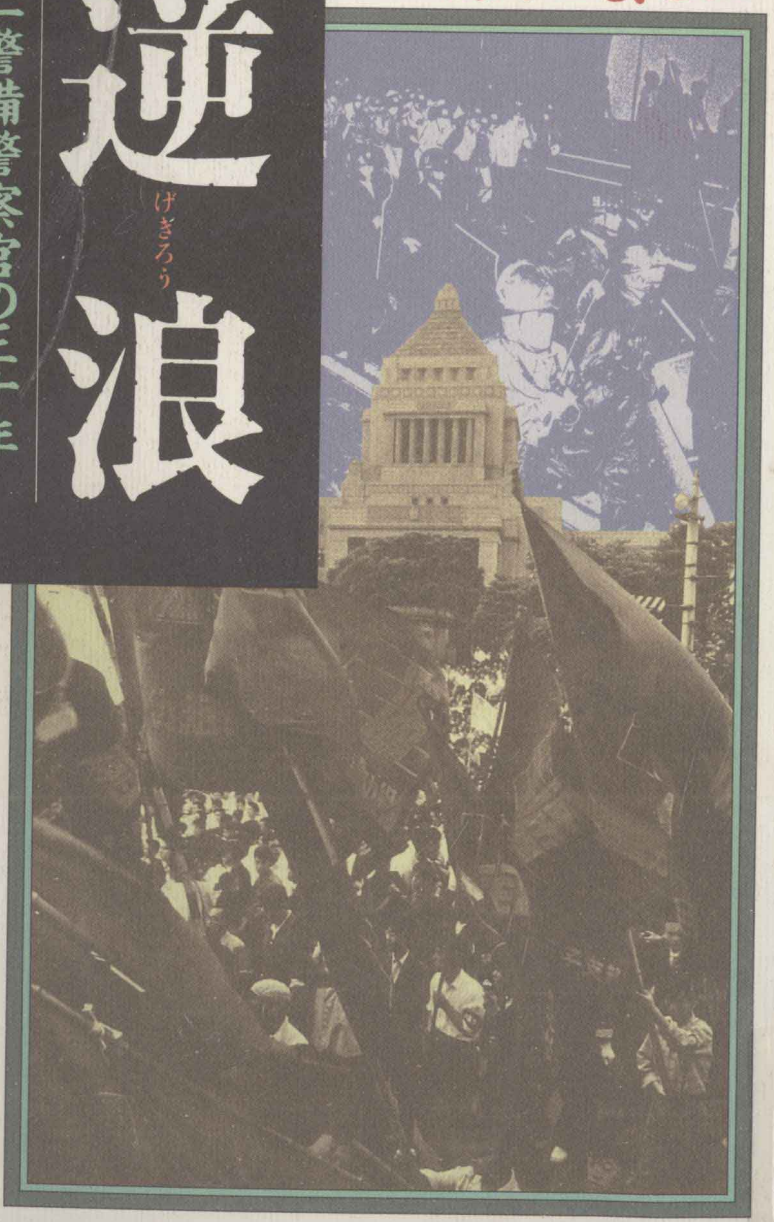
Morita Naruo

もりたなるお

逆浪（げきろう）

一警備警察官の三十年



新潮社

逆浪（はろう）

一幸福実現党宣言の三十年

りたなるお
Nariko

新潮社

逆浪
——一警備警察官の三十年——
発行——一九九三年一〇月二〇日

著者——もりたなるお
発行者——佐藤亮一
発行所——株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一
電話——営業部(03)三二六六—五一一一
編集部(03)三二六六—五四一一
振替——東京四—八〇八
印刷所——二光印刷株式会社
製本所——大口製本印刷株式会社
© Naruo Morita 1993, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。
ISBN4-10-355902-0 C0093

目次

序　章　5
第1章　丸腰の警察官　15
第2章　揺れる昭和新撰組　47
第3章　大岩上のパーティー　64
第4章　奔流するゲバルト　78
第5章　警備の小休止　111
第6章　機動隊対全学連　129
第7章　東大落城　159
第8章　大部屋の柱　178
第9章　睨み出す勝利　201
終　章　210
あとがき　216
取材協力・参考文献

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

逆(げき)浪(ろう)

――警備警察官の三十年――

序章

1

草思堂の長屋門を出た吉川英治は、門前の小径を歩き、表の通りに止まっていた青梅警察署の車に乗り込んだ。

快晴である。前日に降った雪が朝日に輝き、道も家も梅林も、眩い光を放った。車は吉野街道を下り、多摩川に架かる万年橋を渡って青梅の街へ入っていった。

警察署の玄関には、警務主任以下数名が出迎えていて、一斉に挙手の礼をし、吉川英治を署長室に案内した。警察署の屋根からは、雪解け水がポタポタと垂れ、まだ二月のはじめだというのに、春を思わせるような暖かさであった。

吉川英治が署長室に入り、署長と次席が丁重な挨拶をしているところへ、金色の五個のボタン

がついた茶褐色の服を着た少年警察官（警察書記）が、大型の丸盆をささげ持ってお茶を運んできた。
少年警察官は、茶碗をテーブルの上に慎重な手つきで置くと、直立不動の姿勢をとり、深々とお辞儀をして去った。少年のネジ巻き人形のような動作を、吉川英治は目を細めて見送った。
吉川英治はなにか問いたげな様子であったが、
「本日は、本署員ならびに立川、八王子、五日市各署より六十七名ほどの警察官と警察職員が参集しておりまして」
と次席が説明をはじめたので口を閉じた。二階の訓示室に待機する警察官は、吉川英治の時局講演を聴くために招集されたのだった。
東京に空襲が激しくなり、難を避けた吉川英治は、青梅警察署管内の吉野村上由木に疎開していた。土地の旧家を移築した住居には「草思堂」という表札が掲げてあった。
剣豪小説「宮本武蔵」を書いた吉川英治は、武士道に通暁した小説家で、日本精神を説く国民文学の担い手……という認識が警察署の幹部にあった。
多摩地区に疎開されたのを縁に、講演をお願いし、警察官の士気高揚に役立ててはどうかという発議があって、青梅警察署長が交渉に当たった。
「御署の管内に仮住まいしますのも、なにかのご縁です。お役に立つかどうかわかりませんが、お引き受け致します」
という承諾を得て、今日の日を迎えたのである。

吉川英治は小柄な体を演壇に運び、机に両手をのせ肘を張った。
軽く一礼して顔を上げ、まず聴衆にそそいだ視線を窓外に運ぶと、外光にまばたいた。
「良いお天気ですね」
そのひとことで、部屋の空気が和らいだ。
机上に活けた梅と、講師の飾り気のないことばが、演壇に清々しい雰囲気をつくった。
「雪のあとの好天を、この地方では裸虫が洗濯をすると言うそうですね」
問いかけるような話し振りに、年輩者がうなずいた。
裸虫とは、衣類の数を持たない貧しい人のたとえである。降雪の後の晴天は、雪の照り返しがあるためか、暖かい日が多い。それで、一張羅の着物を脱いで洗濯をし、裸でいても寒さを感じないという意味で言われた。
「時局について申し述べよということでございます。時局の趨勢ということでありましょうか。あるいは、難局に身を処する気組みをとのご注文でもありましょう」
吉川英治はここで言葉を切ると、視線を青磁の壺に活けられた梅に移した。
「わたしは、物語を綴ることを職とする一介の文筆家でございます」
梅の花に目をやったまま言った。
「書斎の人間ですから、時局の趨勢については、葭の髄から天井を覗くあんばいで、まことに頼りないものです。そこで書斎人らしく、歴史書のなかから戦乱、動乱を拾い上げまして、その時代相、人心のありようなどを述べてみることに致しましょう。裸虫の洗濯よろしく、真情を申し

述べてみようというわけです。その話のなかに、皆さまのお仕事のお役に立つなにかがありましたなら、御賢察をいただきたいと存じます」

吉川英治は、ゆっくりと後ろを向くと、白墨を持った手を思い切り伸ばし、黒板に和歌を書いた。

汝や知る都は野辺の夕雲雀
上がるを見ても落つる涙は

「応仁記という書物に出てくる歌です。応仁の乱は、応仁元年から文明九年までの、ほぼ十年間を戦乱に費やしました。足利将軍の豪奢な生活、上流の女人、高僧たちの政治介入、武家の相続争いや勢力争いなどによって、天下は麻の如く乱れました。騒乱は京都にとどまらず、諸国に拡大波及し、都市も村落も打ちつづく戦乱に疲弊して、人心は荒廃の極に達したのです。京の都は焼け野原となり、都人は放浪します。平時であれば百姓町人は貧しくとも恙なく暮らすことができますが、戦乱のために家を焼かれ、田畑を荒され、根なし草のように故郷を離れていったのです」

戦意高揚、士気鼓吹のはずだった講演の思わぬ展開に、前列に陣取った幹部たちの表情には、困惑の気持ちが現われはじめていた。

「戦乱なかりせばと申しました。戦乱のためにとも言いました。前者は願望でございます。後者は現実です。平穏の願いは願いとしまして……現実には多くの戦があり、悲惨がありました。それをお話しします」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幹部たちの顔は強張っていた。それにはかまわず、吉川英治は、史上のさまざまな戦争を引用して、それは歴史の必然的な宿業であるかも知れないと述べた。

さらに人心の荒廃に言及し、人間社会を平時と戦時に分け、その様をたとえる話をはじめた。

「ここに水を満々とたたえた池があるとします。池面は平らで穏やかです。水鳥が遊び、ときには銀鱗が躍る。流れゆく雲、輝く太陽。山の端に懸る月、深緑の山々。あるいは紅葉する木々、そして池畔に憩う人々の姿……こうした諸々を写して、池面は趣をたたえます。いってみればこれが平時の現世です。では戦時の様相はどうでしょうか。渇水状態だと思います。安らぎと美しさをたたえていた池水は干上がり、底が現われる。それが戦乱の世相なのです」

吉川英治は、灰燼に帰した都に思いを馳せるかのように、黒板に書いた和歌を振り返った。

「戦乱は、いままで池底に隠されていた人間の悪い性を露呈します。干上がった池の底には、普段は表に出ない諸々の醜悪が横たわっていました」

吉川英治の話は、あくまでも過去の歴史にのっとったものだった。

「戦を起こした人、応戦した者。これに巻き込まれた人々、戦のために土地を追われた人たち。それらすべての人間は、憎悪、反目、陰謀、略奪、殺戮、凌辱、放火など、あらゆる諸悪の露呈に疲れ果てました。精根尽き果てたわけです。しかも人々は生きつづけました。いくつもの戦がありました。そのたびに、人の世は池底の瓦礫を露にし、いっこうに改めることをしない」

話の展開に、警察官たちも一様に戸惑う風だった。宮本武蔵の武勇伝が聞けると思って集まった者が大半なのである。

「歴史に記録された幾多の戦争は、いつか必ず止みました。そしてまた新たな戦争をはじめます。人間は、新たな戦争をはじめるために戦争を止めるのではないかと思えるほど、平時と戦時の歴史を繰り返したのです。争いと和睦を交互に繰り返して飽くことがない」

数人がうなずいたが、殆んどの者は憮然とした表情である。

「人の世を人間の身体にたとえますと、平時は健康体で、戦時は病みの状態です」

そう言って吉川英治は、上体を激しく震わせた。なにものかに抗議するかのようであった。さらにいくつもの例を引き、平時と戦時の違いを述べた。そして、戦乱がもたらす世相の混乱と人心の荒廃は、戦を病む現象であると結論した。

吉川英治は、黒板の和歌を消すと、新しく〝山紫水明〟と書いた。そして一度聴衆の側に向き直り、再び黒板に向かうと、山紫水明の字に並べて〝国破れて山河あり〟と書き添えた。厳しかった表情がやわらいでいた。

「当地は、風景も人の心も、ともに美しいところでございます」

と結び、丁寧に一礼して降壇した。

2

青梅警察署吉野村駐在所勤務の佐々木為吉巡査は、吉川英治の講演を聞いた日の日記にその感想を書きつけた。公務の駐在日誌とは別の個人日記である。

昭和二十年二月十日、土曜、晴。

本署警務係の動員に応じ、訓示室にて小説家吉川英治氏の講演を聞く。吉川氏は都内より当駐在所至近の梅郷に疎開してきた小説家で、「宮本武蔵」の作者として著名なり。本官は、武蔵の求道精神ならびに武芸についての講話を大いに期待したが、話は別の方向に逸れた。吉川氏の論は、戦争の正義にはいっさい触れず、悪の面をのみ強調したる気味ありて、本官にはいささかもの足らぬ感あり。一億火の玉となりて最後の決戦に臨むべきとき、戦を病むなどと語ることは、時局を弁えぬ言辞である。本官は納得せず。吉川氏の日常は質素にして勤勉、性格は温和である。したがって地域住民も敬慕しており、当局に対する協力も積極的である。然るに本日の講演は、氏の日常態度と背反するものと思われる。本署の幹部はいかなる感想なりや。

午後三時より約一時間、受持区内の警邏ならびに戸口調査を実施した折、吉川英治邸門前まで自転車を走らせたり。邸内はひっそりとして息をつめたる様子であった。夕刻、諸方の山裾、山腹より炭焼く煙の立ちのぼるを見る。軍が航空燃料とする松根油製造の釜より立ちのぼる煙もまじるなり。蚕室、木小屋などを改造し、仮住まいする疎開者の家々からも、夕餉をつくる細き煙の立つ様も、いつもと変わらぬ夕景である。警邏より帰り、制服のまま駐在所裏手の蔬菜畑にゆきて、雪囲いの下に保存せる大根と葱を取り出して、勝手口に運ぶ。深夜の空襲警報なきことを祈りて床に就く。

少年警察官森田高義も、当日のことを日記に書いた。

3

昭和二十年二月十日　㈯　快晴

本署の訓示室に、宮本武蔵や神州天馬俠の吉川英治先生をお招きして、時局講演会が催された。吉川先生は、僕の家と同じ地域の吉野村に疎開してきた人である。何度かお姿をお見かけしたことはあるが、お話をうかがったのははじめてであった。小説に出てくる人のように豪快なお話をされるのかと思ったら、思いのほか優しい声の話しぶりだった。冒頭に〝裸虫の洗濯〟というのが出て、土地のことばを研究されているのに感心した。戦争は人心を荒廃させるという話にも一理ある気がした。一億一心で団結しているのは確かだが、僕は警察に勤めているので、その反対の現象も見てしまう。戦時下の種々の規制や規定をすり抜けて、得をしようとする者は、地位や貧富の差に関わらずいるのである。食糧や衣類のことになると、しばしば争いが起きる。僕の住む地区は林業と農業を半々にするところで、至って純朴な気風なのだが、それでも疎開者を見下す風潮が出ているし、規制されている主食、準主食の米、麦、豆類などを買い出しの人へ密かに売る者もいる。戦争が人間の心の底に潜む欲や残忍性を露にするという吉川先生のことばには真理があると思った。しかし、戦争を始めた

以上、吉川先生の言われる悪い面は面として、敵国に負けてはいけないのだ。あくまでも勝利をおさめて、吉川先生がおっしゃった山紫水明の地を守らなければならない。明日は早朝防空演習がある。こんな東京の山間部にも、艦載機が飛んできて機銃掃射をしていく。百姓はうっかり畑仕事もしていられないと言っている。山紫水明の地もいまや戦場と化しつつあるのだ。いっそう精神を引き締めなくてはいけないと思う。今日のお昼に出た後藤亭の特別弁当はうまかった。後藤亭は主に留置人の弁当を入れる業者である。米の特配などもあって、警察行事には、塗物の重箱に入った特製弁当を納入する。留置人に米飯は出さないが、中央からくる視察者には白米の飯を出す。僕は警察に奉職する身だから贅沢な昼めしが食べられるのである。しかしこうした特権も反省の必要があると思う。

けさ出勤するときに、万年橋の近くの竹藪で、たどたどしい鶯の鳴き声を聞いた。もう春も間近かである。

4

昭和二十年五月一日に、少年警察官森田高義は、吉野村民や青梅警察署員等に送られて、青梅駅から出征した。前夜の日記にはこう書き残した。

昭和二十年四月三十日　(月)　晴

僕のような体の小さい者にも召集令状がきて、いよいよ明日出征するのである。戦局は必ずしも有利とは言えないが、われに天の助けのあるを信ずるなら、必ずしも不利とは言えまい。ましてや大和魂あるにおいてをやである。戦争の帰趨を悲観的に考えてはならない。消極的な思想は墓穴を掘る。美しき日本の国土を、鬼畜どもの軍靴に断じて蹂躙させてはならないのだ。僕は自らを恃んで勉強し、また周囲からも期待されて今日までの歳月を生きてきたが、いよいよ明日の出発をもって、生涯の一大転機を迎えるのである。国に決戦のとき至り、われには決算のときがきた。潔く命を捨てる覚悟を持つべし。神州不滅を信じて之を記す。

森田高義ら出征兵士を乗せた立川行の電車は、終点のひとつ手前の西立川駅で停車し、乗客は近くの防空壕へ避難した。空襲警報が出たのである。武運長久の襷を掛けた出征兵士たちは、防空壕のなかで、まわりの人々に激励された。防空壕のなかで森田高義は、出てきたばかりの吉野村の風景を思い出していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.